

vol. 13

共存する 地域の農家も 大切なお客様

Nagai Farm Business Style Note

永井進の 農場スタイル ノート

永井 進

Nagai Susumu

1971年、長野県生まれ。
（有）永井農場専務取締役。長野
県東御市で酪農と稲作の複合
経営に取り組みながら、従来
の大規模化とは異なる農場発
展の可能性を模索している。
<http://www.nagaifarm.co.jp/>

僕

「僕」たちのコメが「東部町産」というだけで、地元の米屋からまともに相手にされなかった経験は、コメの販路を開拓していくうえで大きなバネとなりました。以前はそれだけ無名のブランドだったわけですが、競争を求められる首都圏のマーケットで商品力や提案力を磨いていくうちに、少しずつ認知していただけるようになってきたと思います。

でも、僕たちは永井農場のコメさえ売ればいいとは思っていません。田植えや稲刈りなどの作業受託で関わっている地元農家さんも、永井農場にとっては大切なお客様です。そのお客様のコメも有利販売できる環境を作るため、僕たちが窓口となってマーケットにつないでいこうと考えるようになりました。

地域の営業マンのような気持ちがあったので、飛び込み営業も苦にはなりません。そして幸いにも思いを共有できる東京のお米屋さんとの出会い、それをきっかけに商品化が実現することになります。天日干しを行なっている50軒ほどの農家さんが作るコメに「信州自然乾燥米」と名付け、専用のパッケージも制作して販売することになったのです。

旧東部町のコメが東京で認知され、高級スーパーの店内に売り場ができていく。僕はそれが本場に嬉しかったし、まわりの農家さん





写真左／ナチュラルドライストッカーを備えた永井農場のライスセンター。地元農家の調製ニーズにも対応している。「ただ売れば良いというならもかく、自分が作ったものを自分で食べたいのが農家。そういうニーズに応えるのも永井農場の役割」と永井氏は言う。ある意味、地元農家向けのサービス業ともいえる。写真中・右／ライスセンター施設内部。

にもこれからは自信を持ってやろうと伝えてきました。僕たちの地域のコメは決して悪くないから頑張ろうよ、自分で自分のコメを売ろうよと呼びかけてきて、それがようやく地域にも浸透してきた気がします。

前回もお話しした通り、長野県内での取引も増えました。「信州自然乾燥米」とはまた別の商品ですが、県内のお弁当屋さんに使っていただいているコメも、永井農場が作業を受託している圃場で生産されたものです。その消費量は、実に毎日1tにもなります。

地 域の農家も大切なお客様」という考えは、祖父の時代から受け継いでいるものです。祖父は大農家の生まれではなく、近隣農家さんから仕事をいただいで少しずつ積み上げてきたタイプ。本当に苦しくて、皆さんのお手伝いをさせていた

だかなければ、生活が立ち行かなくなつたんですね。たとえばリヤカーに籾摺り機を載せ、いろんな農家さんの庭先に出かけていって、そこで籾摺りの仕事をいただく。そうやって集めたお金で少しずつ土地を買ってき、いまの永井農場の基盤を作ってきたんです。

困っている農家さんに対してどんなフォローをすればいいのか、

そんな視点で農業に取り組んでい

たからこそ、祖父は近隣農家さんの信頼を得ることができたのでしよう。1995年には永井農場に精米プラントが完成し、翌96年にはナチュラルドライストッカーも導入しましたが、祖父が築いた関係のおかげもあって、多くの農家さんがこのライスセンターを利用してくれます。各自が稲刈りしたものを持ち込んで籾摺り機にかけ、うちで食べる分は持って帰る。それで残りは「永井さん頼むね」といって、僕たちに販売を任せられるんですね。

ですからこのライスセンターは、ただ永井農場がコメを販売するただけにあるのではなく、地元農家さんの調製ニーズに応える機能も持っているわけです。農家なら

誰かが1年間手塩にかけて作った自分のコメが一番おいしいと思うものですが、大きなライスセンターでは自分のコメを食べられないという悔しさがあります。複数の農家のコメがブレンドされてしまいますから、自家用米が返ってきても、それは自分のコメではないんです。だから永井農場では、農家さん一戸一戸のコメを個別に乾燥、籾摺りしてお渡しするようにしています。それが僕たちのよ

うな小さいライスセンターならではの役割だと思っています。補助金に頼らず、自己資金で建設したライスセンターだからこそ、こうした自由な使い方や販売ができたともいえます。

永井農場には「自分で作ったものを自分で販売できる環境作り」「地域農業の振興の核となるような経営体を目指す」という経営コンセプトがあります。この考えをもとに百年後もこの地で元気に農業を続けているためには、地域のコミュニティが維持されていることが不可欠です。だからこそ永井農場がメガファーム化するのではなく、近隣の農家さんと共存共栄していくことが大切だと考えています。

現在、永井農場の経営面積は自作地が20ha、受託が30haほど。これからも増えそうな傾向はありますが、中山間地という条件で、田植えや稲刈りを1カ月で終わらせることを考えると、いまの規模が限界ではないかとも感じます。人や設備を増やせばいいかもしれませんが、幸いにして周囲には意欲のある農家さんもいます。そういう方々と互いに良い関係を築きながら、地域の農業を元気にしていきたいですね。

(談)